

デュルケーム、モース、レヴィ＝ストロースの数理

同志社大学 落合仁司

1 目的 デュルケーム、モース、レヴィ＝ストロースに代表されるフランス社会学派は、諸個人の相互行為に外在しそれを拘束する行動、思考及び感覚の様式としての社会構造を発見し、諸個人の戦略的な相互行為から社会構造を説明しようとする合理的選択論等の社会理論とは区別される、思考あるいは感覚の社会構造が、諸個人間の知識の贈与・受領あるいは身体の贈与・受領等、人間にとって最も基本的なコミュニケーションとしての相互行為を拘束し、同時にそのような相互行為が社会構造を持続させると考える社会理論を構築した。

本論はこのフランス社会学派の社会構造と相互行為の関係を数理モデル化し、その論理的な帰結を考察する。

2 方法 本論はフランス社会学派の構造に拘束された知識や身体を実数で表現することにより、社会構造をユークリッド空間分けてもユークリッド空間の部分集合の貼り合わせである多様体で表現し、また知識の贈与や身体の受領を実数の微分で表現することにより、相互行為を多様体上の微分形式で表現し、数理モデル化する。

3 結果 本論はこのモデルによって、多様体上の微分形式に関するストークスの定理から、社会構造の圏と相互行為の圏は同値であることを導出する。これに基づいて、社会構造の圏の射、すなわち社会構造のシフトと、相互行為の圏の射、すなわち相互行為のドリフトは全単射の関係にあること、言い換えれば社会構造の圏と相互行為の圏は随伴であることを論証する。

4 結論 社会構造のシフトから相互行為のドリフトへの全単射は、社会構造は相互行為を拘束するというフランス社会学派の基本命題の数理的表現と考えることができる。その逆射、相互行為のドリフトから社会構造のシフトへの全単射はどう考えればよいのか。フランス社会学派はこの射を合理的選択論のように諸個人の戦略的行為の「均衡」とは考えない。フランス社会学派の歴史学版と言ってよいアナール学派の創始者ブローデルの言葉を借りれば、相互行為は社会構造を持続させる。相互行為のドリフトから社会構造のシフトへの全単射は、相互行為は社会構造を持続させるという命題の数理的表現と考えることができよう。

文献 Braudel, Fernand, 2013, *Écrits sur l'histoire*, Paris: Éditions Flammarion.

Durkheim, Émile, 2010, *Les règles de la méthode sociologique*, Paris: Éditions Flammarion.

Lévi-Strauss, Claude, 1967, *Les structures élémentaires de la parenté*, Berlin: Mouton de Gruyter.

Mauss, Marcel, 2012, *Essai sur le don*, Paris: Presses Universitaires de France.